『論叢』玉川大学文学部紀要　第63号　2022年，pp. 41～59

英語教員養成課程における文学教材の扱い
―Alice Walker “The Flowers” 精読演習の試み―

丹治めぐみ

要　約

2017年に公開された「教員養成・研修　外国語（英語）コア・カリキュラム」において，「英語文学」は「英語科に関する専門的事項」の一つに分類され，3つの学習項目とそれぞれの到達目標が示された。引き続いて行われた研究「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」の報告書（2021）からは，「英語文学」に関して学生の到達感が他の項目に比べて低いという結果が出ている。本稿は，このような結果を踏まえたうえで，教室で精読を展開する前提でAlice Walkerの短編小説の読解例を提示する。コアカリキュラムが設定した到達目標の実現には文学作品の精緻な読みが有効であることを示し，ストーリーを追うことを原動力として英語教員に求められる英語を読む力・調べる力・考える力の育成を提唱する。

キーワード：英語教員養成コアカリキュラム，英語文学，短編小説，精読，辞書使用

1. 言語の教育と文学教材

文学作品を言語教育の教材とすることをめぐる議論の歴史は長い。近年は，2018年に告示された新学習指導要領が高校の国語科共通必履修科目として「現代の国語」「言語文化」，選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」を設置することを定め，それに伴って「国語教育から文学が消える」ことをめぐる議論が盛んに行われている。英語教育においても，例えば2004年に『英語教育』誌が「英語教育に文学を！」と題する特集を組んだことに代表されるように，「文学が消える」ことに警鐘を鳴らす動きが始まって久しい。

英語教育に文学教材がどのように用いられてきたか，またその意義についてどのような議論と実践が行われてきたかについては，伊村元道氏の『日本の英語教育200年』（2003），江利川春雄氏の『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』（2008）や『英語教育論争史』（2022）など，膨大な研究が行われてきた。それらの研究が明らかにするのは，「『文法訳読か，話せる英語か』という論争は明治期から行われ」（江利川2022，5）てきた経緯で

所属：文学部英語教育学科　受領日　2023年1月12日

あり，また第二次世界大戦後は時の政府や産業界の要望に応えながら学習指導要領の改訂が重ねられるなかで，文学教材が次第に減少してきたという事実である（江利川2008など）。中学校・高等学校の英語教育においては，1993年版教科書以降，文学教材を正課から外す傾向が現れ（高橋2015），その後も続いた（西原2020）。江利川によれば，それは学習指導要領の改訂によるものであり，「文学教材にとって学習指導要領は『いじめっ子』のような存在」であるという（江利川2008，81）。

指導要領の改訂により文学教材の位置づけが変わる中で，大学の英語教員養成課程で文学教材がもつ可能性について，教職課程コアカリキュラムと文学研究をどのように関連させることができるだろうか。本稿は，教職課程の「英語文学」の要件を満たすものとして設置されている英語文学の科目において，どのような教材を選び，受講する学生が何をできるようにする授業が必要なのかを検討する。

2. 英語教員養成コアカリキュラム（中学校・高等学校　教員養成課程）における英語文学の扱い

2–1　コアカリキュラムが設定する学習項目と到達目標

2017年3月に発表された「教員養成・研修　外国語（英語）コア・カリキュラム」において，「英語科に関する専門的事項」は「英語コミュニケーション」「英語学」「英語文学」「異文化理解」に分類された。そのうち「英語文学」については，以下のように定められている。

【全体目標】
英語で書かれた文学を学ぶ中で，英語による表現力への理解を深めるとともに，英語が使われている国や地域の文化について理解し，中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる。
【学習内容】
◇学習項目
①文学作品における英語表現
②文学作品から見る多様な文化
③英語で書かれた代表的な文学
◇到達目標
1）文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
2）文学作品で描かれている，英語が使われている国や地域の文化について理解している。
3）英語で書かれた代表的な文学について理解している。

これに関して，粕谷ほかによる3か年（2018 ～ 2020年度）にわたる科研費基礎研究B「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」報告書において，コアカリキュラムに含まれる項目の理解度や身につけた知識・技能について学生が自己評価する形式のアンケート調査が行われた。対象は教職課程の履修をほぼ終えた国立大学2校と私立大学4校の計199名の学部生で，その結果は以下のようであった。

> 「英語コミュニケーション」及び「異文化理解」に関する項目については，概ねすべての項目において平均が3.5前後であったのに対し，「英語学」に関する3項目のうち，「英語の音声の仕組み」と「英語の歴史的変遷及び国際共通語として英語の実態」に関する項目は，平均が3.0程度にとどまり，「英語文学」に関する3項目については，すべて平均が3を下回っていた。（粕谷ほか2021，92）

「英語文学」に関する項目とそれぞれの平均は，「文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している」（2.74），「文学作品で描かれている，英語が使われている国・地域の文化について理解している」(2.82)，「英語で書かれた代表的な文学について理解している」（2.80）となっている。学生には文学作品を読むことで英語読解力が高まった実感がなく，背景にある国や地域の社会や文化に関する理解が深まったとは思えず，文学史的な知識の幅が広がったとも言えない，ということであろう。「異文化理解に関する項目」において「世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している」（3.45），「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して，文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している」（3.53），「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している」（3.24）という結果が出ているのと比較しても，また，「英語コミュニケーション」に関する6項目や比較的平均値が低い「英語学」に関する3項目と比較しても，「英語文学」に関する数値は低い。さらに，中高英語の教員免許取得に関わる大学の授業について，「役に立った」と感じることや，「改善した方が良い」と思うことは何かという問いへの回答に出現した語を調べたところ，「文学」はわずか1回であったという（粕谷ほか2021，99）。これらの結果は「英語文学」に関してコアカリキュラムに掲げられた到達目標が達成されているとは言えない実態を物語る。それ以上に大きな問題は，学生が文学を学ぶことに興味を持てなかった，文学作品を読むことであまり心が動く経験をしなかったと思われることである。

コアカリキュラムの「英語文学」の目標設定に疑問を呈する見方もある。森本（2017）は，国際共通語としての英語をどのように位置づけるかという観点から問題点を指摘している。「英語科に関する専門的事項」における「英語学」の到達目標の一つとして「英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している」が掲げられている一方で，「異文化理解」について「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している」が，「英語文学」について「文学作品で描かれている，英語が使われている国・

地域の文化について理解している」が，それぞれ到達目標に含まれている。「英語が使われている国・地域」をイギリス，アメリカ，カナダ，オーストラリアなどと想定すれば，英語が特定の地域に限らず国際的なコミュニケーションに使われている状況，すなわち国際共通語としての英語という理念と矛盾するという指摘である。

日本において英語による文学の研究がイギリスとアメリカの文学中心とするものになったのは，明治期に国際社会の一員となろうとする過程で起こったことであり，「今日，英語の使用が世界の諸地域に広がり，英米の国内でさえ，さまざまな民族や国家意識が混淆していることを考えれば，この英米中心型英文学研究には再考が必要になる」（原田2017，iii），あるいは「英語『圏』という語を，固定した地理的イメージでとらえることは，今や実態にそぐわない」（中村2017，236）という認識が「英米文学科」のような課程で学びかつ教えてきた研究者にも広がりつつある。中村は，世界各地からイギリスやアメリカへの移民やその子孫たちがさらに移動して英語で作品を書いている状況を指摘し，「英語圏文学という視点は，このように民族や国境を越えて動く『いま』をとらえることができる」と述べている（中村2017，237）。だが，英語による文学においてもっとも長い歴史をもつのはイギリス文学であり，次いでアメリカ文学である。同様に研究の歴史が長いのもこの両国の文学である。森本と中村がそれぞれの研究分野から指摘する，英語という言語を固定した地理的・文化的なイメージでとらえることの問題性を踏まえつつ，英米の文学をどのように教材として用いるかを模索するということも必要である。

「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」は，中等教育英語教員養成課程を持つ大学の教員を対象にした調査も行っている（粕谷ほか2021，のべ104大学の148名の教員が回答）。このうち，「『英語文学』に関する課題・問題点及び工夫」に関しては，以下の点があげられた。

・優れた作品は難解になりがちで，学生が本当に理解できるか不明
・学生は精読の訓練をほとんど受けたことがないので，基本的な「読み」の訓練に時間をとられる
・代表的な作品を読めるほどの英語力や時間的余裕がない
・作品選びが難しい，担当者の力量不足，文化理解として文学を扱い，語学力を高めるために文学を扱う，両方の目的に資する素材選択が難しい
・英語で書かれた代表的な文学についての扱いが本学では弱い
・18世紀以前の文学を扱う際，学生は古い時代の英語に慣れていないので，現代英語とのギャップを埋めるのに苦労する
・なるべく標準的な英語が使われる作品を素材とするようにしている
・短い時間で多くの作品を取り上げるため，知識の定着を図るのに苦労するが，演習のように取り上げる作品を限定すると学習内容も限られるので，そのバランスをとるのに苦

労
（粕谷ほか2021，121）

教職課程を開設している学科の専門性にもよるが，「昨今の，特に日本の大学における英語教育に，いささか過剰に見られる反・英文学的状況」（原田2017，v）があるとすれば，限られた科目数・時数で「英語文学」を扱う難しさが窺われる。また，開設される科目が講義か演習か，受講者は何人かといった条件にも直接影響される。作品に取り組むことと並行して文学史的知識・英語史的知識を得ることを前提とできず，20世紀以降の作品を選択する場合が多いことも推測される。また，大学英語教育がリーディングの力をアカデミック・スキルとしてとらえ，各種英語検定試験に対応する練習を積むことに比重をおけば，学生はスキミングやスキャニングによって要旨を把握する力をつけられても，テクストを精読する経験は乏しいということになるかもしれない。加えて，作品読解により英語力を高めるという期待に添うと同時に，その作品が置かれた社会的・文化的文脈に踏み込んで文化的な知識や感性を高めるという，2つの目的を果たそうとすることの困難も課題であることがわかる。

2–2　文学テクストを用いる意義

そもそもなぜ，文学テクストが英語教育の教材として用いられるのだろうか。久世（2019）は，外国語教育の中で文学教材を用いる意義がどのように認められてきたかについて，それを分類することの困難を認めたうえで，「言語に関する意義」「感情や人間形成に関する意義」「文化に関する意義」に整理してしている。「言語に関する意義」としては，言語の形と機能に関する意識（language awareness）を高めること，読解力を伸ばすこと，語彙や文法事項の学習を助けることなどが論じられてきた（久世2019，52–53）。「感情や人間形成に関する意義」はすなわち「学習者の心への影響」である。物語に心を動かされながら読むときに，学習者は自ら進んで読むようになり，それが言語の発達を促すと考えられる（久世2019，54）。言語への感受性を豊かにするうえでも，読むことが面白い，楽しいという感情が高まれば効果が大きくなると予想される。そのためにも，関心をもって読める作品を選んだり，面白いと思える読み方をできるように授業の進め方を工夫したりすることが必要であると言える。「文化に関する意義」は，「文学作品を教材として使えば，特に意識しなくてもその作品に描かれている時代や文化的な背景についての知識を得ることができる」という主張である（久世2019，55）。ただし，これについては，「外国語教育の中で目標言語が話されている国や地域の文化を教える必要があるかどうか」という疑問が呈されていたり，外国語教育の教材としての文学テクストが他のテクストにない役割をもつという考えに対する異論が唱えられたりしている（久世2019，59-61）。久世が3つに整理した「意義」のうち「言語に関する意義」はコアカリキュラム学習項目①の「文学作品における英語表現」に，「文化に関する意義」は同②「文学作品か

ら見る多様な文化」におおむね対応すると考えられる。しかし,「感情や人間形成に関する意義」すなわち物語に心を動かされてそれが言語的発達を促すという面は，コアカリキュラムには言及されていない。この点は一つ大きな課題である。

一方，英語で書かれた文学を専門とする研究者の立場からも，提言がなされている。日本英文学会（関東支部）編の『教室の英文学』（2017）は，第1部を「英語を教える」，第2部を「社会・文化を教える」とし，第3部は多くの論考が「～への誘い」と題され詩・小説・児童文学・ファンタジー・批評などを扱いながら，日本の大学でこれらを学ぶ意義や課題を取り上げている。教職課程コアカリキュラム「英語文学」の学習項目①文学作品における英語表現，②文学作品から見る多様な文化，③英語で書かれた代表的な文学と，大枠において一致するとみることができるだろう。注目すべきは，『教室の英文学』の第2部の視点である。人種・階級・ジェンダーなどの視座から社会の中で人間を分断する境界となりうるものや，境界を越える力をもつものに目を向ける授業づくりが提示されている。

3. Alice Walker “The Flowers” を題材とした精読の展開

教材として英語による文学作品を用いるときに，まず英文を語彙と文法の面で正しく読解し，さらに特定の文化的背景を考慮しながら表層的な表現の奥に踏み込んで人間観や社会観を読みとることが求められる。登場人物に関心をもち，その行動や心情を追うことを推進力にして読み進めることができてこそ，文学作品を教材とする意義があると言えよう。それには，必ずしも「名作」と呼ばれたり映像化されたりしている作品でなく，むしろ学生自身が始めから終わりまで英語で読み切れるものを用い，個人と社会にとっての現代的な課題と結びつける可能性がある作品が有効であると考えられる。ここでは，その条件に当てはまると考えられる作品として，アリス・ウォーカー（Alice Walker, 1944–）の短編小説“The Flowers”の精緻な読みを試みる。

ウォーカーは，アフリカ系アメリカ人，とりわけ女性の生活と経験を描いてきた作家として知られている。ジョージア州に生まれたウォーカーは，公民権運動のただ中で大学生活を送り，卒業後の1960年代後半にはミシシッピ州でNAACP（全米黒人地位向上協会）関係の仕事に就くなどの経験をした。人種隔離が徹底されていた深南部において白人からの抑圧を受けたアフリカ系アメリカ人には，女性が男性の不満のはけ口とされ時には暴力を受けるという，人種と性の二重の差別を受ける構造があった。ウォーカーの代表作*The Color Purple*（1983）はそうした実情を描いたため，いわば身内の恥をさらすものだという非難をも招いたが，この作品によってウォーカーはアフリカ系女性作家としては史上初となったピューリッツァー賞を獲得し，その名は一躍世界的に知られるようになった。“The Flowers”は，初期の作品集*In Love and Trouble*（1973）に収められた，わずか560語余りの超短編小説である。

Myopという名の10歳の少女が，夏のある一日，森の中を一人歩いていて，白骨化した男性

の遺体の頭部を踏んでしまう。思わず小さく叫び声をあげたものの，Myopはじっとその骸骨を観察し，近くにあったバラの花を摘んで手向ける。バラのそばには引き結びにされた縄（noose）の朽ち果てたものが落ちており，遺骸がリンチの犠牲者のものであったことが示唆される。

アメリカ文学の知識があれば，ウォーカーの作品が何らかの形でアフリカ系アメリカ人，とりわけ女性の経験を描いているということをあらかじめ考えられる。しかし，ウォーカーが現代アフリカ系アメリカ人文学者を代表する一人であるとは言え，文学を専門とするのではないカリキュラムで学ぶ大学生にとってはおそらく未知の存在であろう。アフリカ系アメリカ人が受けてきた差別問題についても，学生の知識は限られている。2020年に沸き起こったBlack Lives Matter運動については関心をもっていても，17世紀初頭から現代にいたるアメリカの歴史的経緯については，ほぼ知識がないことを前提にしなければならない。“The Flowers”を読んで，少女が死を知る物語であるという受け止めはできても，それを19世紀おわりから20世紀前半にアメリカ南部で頻発したアフリカ系アメリカ人へのリンチによるものとして読みとることは難しい。しかし，この作品は，前景にはっきりと見える少女の体験を描きながら南部におけるアフリカ系アメリカ人の人々の苦難の歴史という奥行きをもっているところに，その優れた点がある。読者はこれに気づくことによって，単なる少女のイニシエーション物語にとどまらない，新たな視野を開かれる。

インターネット上には，ありとあらゆる作品に関する情報が溢れ，論文以外にも個人のブログなどの媒体でさまざまな読み方を提示しているものや，翻訳が出版されていない作品の日本語訳を試みたものも載っている。読書家やアメリカ文化に関心をもつ人々の見解に触れ，それに刺激されて自分の作品理解が深められていくならよいが，自分で作品を読むより先にそうしたものを読んだ学生が他者の理解を「正解」として受け入れるにとどまることが多いのも，文学作品を扱う授業でよく見る現象である。「正解」に導こうとするのではなく，ストーリーの展開を丹念に追い，何が描かれているかを探り，そこにどのような「アメリカらしさ」があるかを見出し，さらには特定の地域や歴史的事情を超える何かを積極的に求める読み方・学び方を以下で考察する。

“The Flowers”は，Ron Hansen and Jim Shepard編のアンソロジー *You've Got to Read This: Contemporary American Writers Introduce Stories That Held Them in Awe*（2000）に収録されている。これは，タイトルが示すように，現役アメリカ作家が一人一編ずつ選んだ作品から成り，選んだ作家が書いた2ページの文章が各作品にイントロダクションとして付されている。“The Flowers”を選んだEdward P. Jones（1950–）は，ウェブ版*Britannica*で“American novelist and short-story writer whose works depict the effects of slavery in antebellum America and the lives of working-class African Americans”と紹介されており，2010年からGeorge Washington Universityで創作を教授している。Jonesは，“The Flowers”を創作を学ぶ学生，とりわけ初心者向けの教材として用いると述べたうえで，簡潔さや短さといった特徴をあげたうえで，次の

点を強調する。

> In the end, I say simply, a story should be about some change, large or small, in the universe of a person or people in the story. Generally, there is no story for me if all there is is another day in the life of a character, a day like all the others. (Jones 2000, 580)

人物に起こる変化をとらえて描くことが短編小説の真髄であり，“The Flowers”はまさにそのお手本であるというのである。作品のちょうど中ほどに“By twelve o'clock”で始まる段落があり，時間の経過のうえでも，主人公Myopの行動のうえでも，Jonesが言う変化への転換点になっている。

そこで，作品を午前の部と午後の部に分けて展開を検討するように，読者となる学生をリードする問いを立ててみる。まず，午前の部において，Myopの気分と生活環境についての情報を拾い出すことを求める。Myopの気分は，冒頭の段落で表現されている。

> It seemed to Myop as she skipped lightly from hen house to pigpen to smokehouse that the days had never been as beautiful as these. The air held a keenness that made her nose twitch. The harvesting of the corn and cotton, peanuts and squash, made each day a golden surprise that caused excited little tremors to run up her jaws. (119)

「スキップしていた」「これまでで一番美しい日」「澄み切った空気」「作物の収穫」「輝かしい驚き」「ワクワクする」などの語句が並び，満ち足りて心はずむ様子が描写される。次の段落でも，手に持った棒でフェンスをたたいてリズムを取り歌いながら歩いているという記述や，“... nothing existed for her but her song”というフレーズにより，また10歳という年齢が示されることとあわせて，いかにも子どもらしいイノセンスがMyopに付与されている。第2・第3段落もまだ午前の部で，Myopが次第に自宅から離れるように森の奥へと歩を進めながら，水が湧き出る様子やさまざまな植物に目を向けている。第4段落になると，以下の記述が，次の段落から始まる午後の部に向けた変調を予感させる。

> Today she made her own path, bouncing this way and that way, vaguely keeping an eye out for snakes. She found, in addition to various common but pretty ferns and leaves, an armful of strange blue flowers with velvety ridges and a sweetsuds bush full of the brown, fragrant buds. (119)

森の中で，見慣れた植物だけでなく，見たことがない色や香りの花々に囲まれたイノセントな少女は，楽園に置かれている。同じ段落には，秋にはこの森で母親とともに木の実を拾うとあ

るが，導き手であるはずの母は一緒にいない。「蛇に気をつけながら」というフレーズが，エデンにおいて禁じられた知識の木の実を口にする創世記の物語を想起させ，イノセンスの喪失を予感させる。

また，ここまでの前半部からMyopの生活環境に関する情報を拾い出すというタスクを課すこともできる。冒頭の段落には“corn and cotton, peanuts and squash”（119）という農作物があげられている。このうちトウモロコシとカボチャ類は米国の広い範囲で栽培され，地域を特定することが難しい。しかし，綿花とピーナッツに関しては，容易に特定の地域と結びつけられる。USDA（米国農務省）の2022年の統計によれば，綿花の生産はテキサス州（42%），ジョージア州（13%），ミシシッピ州（8%），アーカンソー州（8%），アラバマ州（5%）の順で，19世紀から変わらず南部の州が上位を占めており，テキサス以外はDeep South諸州に含まれる。また，ピーナッツについては，1900年代初頭からその栽培がアメリカ南部で研究され，綿花を栽培する南東部において綿花との輪作作物として作付けが奨励されたという。USDAの統計によれば2022年現在ジョージア州が全体の55%を占めて圧倒的な生産量を誇り，アラバマ州がそれに続く。このようにして，特定の作物名により，地域が特定されていなくても，舞台が深南部であることが強く示唆されていると結論づけることができる。

さらに，第2段落の“her dark brown hand”（119）は，MyopがAfrican-Americanであることを示す。第3段落冒頭に注目すると，“the rusty boards of her family's sharecropper cabin”という記述から，貧しい住環境が窺われると同時に，一家がsharecropperであることが判明する。cabinは*OED*（オンライン版）によればpoor dwellingと同義である。*OED*がこの意味の用例の一つに，Harriet Beecher Stoweの小説タイトル*Uncle Tom's Cabin*（1852）をあげているように，アメリカ南部において奴隷であったアフリカ系の人々の住まいはcabinと称されていた。さらに，sharecropperという語を英和辞典で調べると，『ジーニアス英和辞典』（第6版 2023）は「小作人」という語義の前に「（主に米）」という注釈をつけているだけで，南部という地域との結びつきは示されていない。『リーダーズ英和辞典』（第3版 2012）はこの語を「（特に南北戦争後に南部の底辺層を形成した）分益小作人」と定義し，冒頭部で示されるMyopの幸福感や高揚感とうらはらに，置かれている生活環境の厳しさを想起させる。*OED*（オンライン版）は，語義のあとに次のような説明を加えている。

> Originally and chiefly with reference to farming practices in the American South in the century following the American Civil War (1861–5). American sharecroppers typically lived in poverty, and sharecropping arrangements were one of the ways in which African-American labour continued to be exploited following the end of slavery.

また，アメリカの歴史的条件により誕生した語句を集めた*A Dictionary of Americanisms*は，*OED*と同じように語の定義をしたのちに，次の説明を加えている。

> The custom of sharecropping was adopted in the South at the close of the Civil War, when it was necessary to come to some agreement with the newly freed slaves to induce them to remain on the plantations and work as formerly. Many systems were tried out, but the share-crop one proved popular. (Mathews 1951, 1510)

つまり，“The Flowers”はアフリカ系であるMyop一家がsharecropperであるという設定にすることで，アメリカ南部におけるアフリカ系の人々が奴隷制度廃止後も続いた不当な搾取により貧困から抜け出せないという社会的な枠組みを読者に意識させているのである。Myopが自宅から森へと向かっていくくだりに“Around the spring, where the family got drinking water, silver ferns and wildflowers grew.”（119）という一文があるが，湧き水を生活用水にしているということは，井戸がないことを示す。実際，*Encyclopedia of Southern Culture*（1989）は，sharecropperの住環境を“pine-board cabins that lacked window glass, screens, electricity, plumbing, and even wells and privies”と記述している（Mertz 1989, 29）。湧き水を生活用水とする状況は牧歌的な光景として見過ごされるべきではなく，Myop一家が社会の底辺に位置していることを印象づけるものである。sharecroppingは，アフリカ系の人々を南部に縛り付け，白人の下にとどめ置き，貧しさから抜け出させないための制度であった。“The Flowers”に描かれているのは一人の少女の体験であるが，それがある特定の社会的文脈に置かれていることが，sharecropperという一語によって明らかになる。一方で，搾取と差別の構造が固定化され特定の人々の人権と経済的機会が奪われた状態からの回復が難しい状況を読み取れば，学生はそれをより普遍的な問題として認識することができるだろう。このように一語からより大きな文脈への広がりは，学習辞典を超えたレベルの辞書や目的に応じた事典の使用によって得られるものであり，英語教師を目指す学生には実際に*OED*など複数の辞書を使い比べる機会を設けたい。

時刻が正午になった第5段落では，Myopは腕いっぱいに摘み取った花をかかえ，家から1マイルほど離れた場所まで来ている。

> She had often been as far before, but the strangeness of the land made it not as pleasant as her usual haunts. It seemed gloomy in the little cove in which she found herself. The air was damp, the silence close and deep. (120)

“strangeness”“not as pleasant as usual”“gloomy”といった語句が連続することで，光と喜びにあふれた朝からは，情景や気分が一転していることが示され，冒頭の段落にあった“The air held a keenness”（119）とこの段落の“The air was damp”が対照をなしている。読者は，このような不穏な語句が連続することで，雰囲気の変化に気づかずにはいられない。

第6段落では，Myopはこれ以上森の中で歩を進めるのをやめる。家に帰ることは

“peacefulness of the morning”（120）に戻ることを意味する。しかし，時計の針を巻き戻すことができないのと同じように，Myopは午前中の自己には戻れない。踵を返そうとしたその時に，白骨死体の眼窩に足を取られ，踵が抜けなくなってしまう。こうしてわなにかかったような状態にならなければ，遺骸に気がつかなかったかもしれない。第7段落にかけて，Myopが目にする骸骨が描写されるが，Myop自身の反応を表す語句として“reached down quickly, unafraid, to free herself”“gave a little yelp of surprise”（120）とあるように，恐怖に震えたり逃げ出したりする素振りを見せず，最小限の動揺しか表現されていない。

第8段落で，Myopは興味津々という様子であたりを注意深く見る。骨と衣服の一部，ベルトのバックルだけが残った男性の遺体が，なぜ埋葬されることなく森の中に放置されていたかが明かされる。

> Myop gazed around the spot with interest. Very near where she'd stepped into the head was a wild pink rose. As she picked it to add to her bundle she noticed a raised mound, a ring, around the rose's root. It was the rotted remains of a noose, a bit of shredding plowline, now blending benignly into the soil. Around an overhanging limb of a great spreading oak clung another piece. Frayed, rotted, bleached, and frazzled—barely there—but spinning restlessly in the breeze. Myop laid down her flowers.
>
> And the summer was over. (120)

nooseは「（引けば締まるようにしてつくった）綱の輪」（『リーダーズ英和辞典』第3版）であり，the nooseは絞首刑を意味する。ロープが，バラの花を取り囲む輪のように，とぐろを巻いた蛇を思わせるような状態で地に置かれている。頭上を見上げれば，巨樹の枝にも朽ちたロープがかかっている。遺体が身にまとっていたと思われるのが労働着であるオーバーオールということもMyopは見逃さない。その注意深い視線がとらえたものと，前半で強く示唆されたアメリカ南部という文脈と合わせて考えたときに，この遺体がリンチにあって放置されたものであることが示される。

アフリカ系アメリカ人の歴史についての知識をもたない読者がリンチという行為をアメリカ南部の文脈において理解するためには，一例として*Encyclopedia of Southern Culture*（1989）のような事典で情報を得ることができる。この事典のLynchingの項目では，「リンチ」という語が法的なプロセスを経ずに自警的集団によって行われる処罰あるいは処刑行為を指すようになったのは，アメリカ独立戦争時代のヴァージニア州で王党派に対してそれを行ったCharles Lynchに由来する，つまりこの語がアメリカ南部発祥であることが述べられる。また，*OED*（オンライン版）は語の定義のあとに，次の説明を加え，リンチ事件の被害者の多くはアフリカ系であったことを述べている。

> Particularly associated with the extrajudicial execution of African Americans, especially that perpetrated in Southern states from the end of the American Civil War (1865) to the Civil Rights movement in the mid 20th century.

NAACPの公式サイトもまた，リンチについての情報を提供している。“History of Lynching in America”と題されたページは，南部のアフリカ系住民がリンチへの恐怖によって支配されていたとしている。

> Lynchings were violent public acts that white people used to terrorize and control Black people in the 19th and 20th centuries, particularly in the South. Lynchings typically evoke images of Black men and women hanging from trees, but they involved other extreme brutality, such as torture, mutilation, decapitation, and desecration. Some victims were burned alive.

この説明によって，長年にわたり白人が暴力と恐怖によって黒人を支配していたこと，木に吊り下げられ衆目にさらされた遺体がその象徴であったことがわかる。

こうして，Myopの夏の一日が，Myop自身がその一員である南部のアフリカ系アメリカ人の歴史と結びつく瞬間について，Edward P. Jonesは次のように述べている。“It is here that Walker takes a leap and the story becomes not just that of a black girl, and one day in her life, but a story about a race and the oppression of that race.”(Jones 2000, 580)人の死を知ることだけで，10歳の少女にはショッキングな体験であり，冒頭部で強調されたイノセンスが失われるイニシエーション・ストーリーとしてこの作品を読むことができる。だが，Jonesが言うように，この作品は近景にMyopのイニシエーションがあるだけでなく，それを起点として300年あまり歴史を遡るアフリカ系アメリカ人の苦難という奥行きを有しているのである。Jonesは同じ作家として，“The Flowers”が“exquisite in its simplicity and brevity”（Jones 2000, 580）でありながら歴史的な深さをもっている，その鮮やかな対比に賛辞を惜しまない。

この短い作品の中には，Myopの「見る」行為に関する語が頻出するのでそれらの語を探すよう学生に求めることもできる。

> Myop watched the tiny white bubbles... (119)
> ... vaguely keeping an eye out for snakes. (120)
> She found, in addition to various common but pretty ferns and leaves, an armful of strange blue flowers... (120)
> It was only when she saw his naked grin... (120)
> ... Myop saw that he'd had large white teeth... (120)

Myop gazed around the spot with interest. (120)

... she noticed a raised mound... (120)

Myopがよく「見る」少女であるからこそ，近景がはっきりと描かれるのであるが，彼女にMyopという名が与えられていることの意味を考える必要がある。myopeは近視の人を指す名詞あるいは形容詞である。子どもとしてのMyopには，身近な生活の楽しさしか視界に入らない。おそらく，貧しさの中にあるという自覚もないであろう。単独で森の奥へ進むとき，いつも一緒に来ていた母親の視野に頼ることができず，自らの目で観察して判断せざるをえない。そのような状況が，Myopを未知のものとの遭遇へ導いたとみなすこともできる。墓に花を手向ける風習は古代から存在したことが知られており，最近の調査ではイスラエルで約12,000年前の墓が花で飾られていたことを示す発見があったという（Nadal, Danin, and Power 2013）。人間にとって原初的な行動ということができ，Myopも自然な衝動によってそのようにしたという見方をしても無理はないだろう。あるいは，花は失われたイノセンスに手向けられたものと理解することもできる。しかし，それは喪失の哀しみだけではなく，人生の次の段階へと歩を進める通過儀礼でもある。自分と家族だけで構成されていたMyopの世界はアフリカ系のコミュニティーの一部に取り込まれる。結末の“And the summer was over.”（120）は無邪気な子ども時代の終焉を宣告する一文であると同時に，アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティをMyopに付与するものでもある。

“The Flowers”では，誰も，ひと言も発することがない。唯一，人が発する「音声」として言及されるのは，Myopが遺骸に気づいてあげる叫び声であり，それも“a little yelp”（120）にすぎない。“The Flowers”を含む13の短編からなる*In Love & Trouble*（1973）では，10作品において同じように登場人物の発話がない。代表作の一つである*The Color Purple*（1982）においては，Walkerはしゃべるような文体で書かれた書簡体というスタイルをとり，「黒人英語を大胆かつ忠実に使って，ある黒人家族の凄惨な生活環境，人間関係を鮮やかに再現し，みごとな効果をあげている」（渡辺2001，92）と高く評価されている。Walkerの最もすぐれた短編作品は“oral tradition”によっているという指摘もある（Petry 1989，20）。Myopが見るものや感じることをMyop自身に語らせないのは，10歳の少女がもつ社会的知識と語彙では，Myopを南部アフリカ系アメリカ人というより大きな文脈に置くことが難しいからであろう。

一方で，Walkerに対しては“habit of telling the reader what the story is about, of making sure that he doesn't overlook a single theme”があると指摘する，厳しい批評もある（Petry 1989，22）。確かに，“The Flowers”は短い中に手がかりが散りばめられていると言ってよく，作家が読者にわからせたいことを見逃さずに読ませるための仕掛けが多い。だからこそ，文学作品を英語で読んだ経験がほとんどない学生に取り組ませるには，扱いやすい。また，長編小説の場合，全体を読み返すということは授業時間でも困難であるが，短編小説であれば可能であり，授業内で読み返して他の学生と意見を交わすこともやりやすい。複数の批評を併せ読み，

Edward P. Jonesのようにeconomy of wordsを評価して賛辞を寄せる批評家だけではなく，Petryのように，これみよがしの仕掛けが過剰であると批判する視点があることを知った上で「自分はどう読むか」を考え，口頭もしくは文章によって考察内容を表現することもできる。

4. 文学作品読解の実際とコアカリキュラム

“The Flowers”のような短い作品であっても，近景に見えるものだけでなく深い奥行きをもつことをテクスト読解によって明らかにできるのは，学生に知ってほしい文学の面白さである。では，このような読み方を教職課程「教科に関する科目」である「文学」の授業の場で学生と教員の協働により進めていくときに，教職課程コアカリキュラムが「英語文学」について想定する学習項目と合致するだろうか。

「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」第2部2.2「専門的事項に関する科目」の項においてモデルシラバスが提示されている。モデルシラバスは，15回の授業の初回テーマを「英語教師に必要な英語文学的知見とは何か」，第2～5回は「テクストの基本構造を読む」「～の物語構造を読む」「～のディテールを読む」「～の全体構造を読む」，第6～12回は「文学作品と映画から学ぶ多様な文化」として英米の有名な作品を1つずつ取り上げている。第13回と14回は「検定教科書で取り上げられた英語文学」としてイギリス文学とアメリカ文学をそれぞれ取り上げ，最終回は初回と同じ問い「英語教師に必要な英語文学的知見とは何か」に立ち戻る構成になっている（粕谷ほか2019，176）。第6～12回の項目には英米各3編の具体的な作品名があげられているが第2～5についてはそうではない。実際に何らかのテクストを取り上げる演習を想定しているのかどうか定かではないが，それをしなければこのカリキュラムでは学生は実際の文学テクストを精緻に読む経験をする機会が乏しくなるだろう。

カリキュラムに付された解説文は「英語で書かれた文学を通じて，中・高等学校で英語を自信を持って指導できるように，学生の英語力，教養，指導技術を向上させることを意識した授業を行う」こと，また3つの学習項目について「教職を意識した内容を扱うようなカリキュラム内容」とすることを推奨している。また，ディスカッションやエッセイ・ライティングなどの「表現活動を含めることで，より多角的に英語文学や文化を捉えさせることができる」とも述べている（粕谷ほか2019，176）。さらに，3つの学習項目ごとに取り組みの具体的提案がなされている。それによれば，学習項目の①に関しては「中・高等学校の英語教員に求められる英語の読解力を，英語で書かれたさまざまな文学作品を読んで理解し，多様な英語表現を学ぶことで，向上させる」（180），②に関しては「英語で書かれた文学作品を読んで理解することを通して，それぞれの作品の時代的，社会的，文化的背景や，そこに描かれている人々の生活や価値観について学ぶとともに，多様な文化への理解を深めることを目指す」，③に関しては「英語で書かれた代表的な文学について，歴史的背景を含めて理解させる」がそれぞれポイントと

されている（粕谷ほか2019，180–181）。

総じて「英語文学」に期待されているのは多様な文学作品にふれることで読解力の向上，作品ごとの文化的背景の理解，さらには人間や社会に対する洞察というふうにまとめられる。このうち文化的な理解については文学から文化へと視点を広げること，そのために映像作品を積極的に取り入れること，また「文学作品を中・高等学校における『異文化理解』の教材として活用するという視点」（粕谷ほか2019，180）をもつように提案されている。

“The Flowers”の読解で試みたように「文学」の授業の場で一つの短編小説を学生と教員の協働により精緻に読むときに，このようなコアカリキュラムの視点をどれだけ取り入れられているだろうか。各学習項目の到達目標との照合を試みることで，“The Flowers”のような作品を取り上げる場合の可能性と，コアカリキュラムが含む問題点を考える。

① 文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。

“The Flowers”を英文読解という観点からみると，Myopの視点で客観的に記述している平易な文体で，構文も複雑ではない。基本的な読解力があれば十分に読みこなすことができ，特に焦点をあてるべき文法事項はない。前半から後半への光から影への展開とそれを示すさまざまな語句を見逃さずにとらえることが求められる。レトリックによらず，10歳の少女の視点を用いて素朴さ，単純さによって読む者の想像力を喚起する表現を味わえるとよい。語彙レベルは高くはないが，sharecropperやnooseのような語については，学習辞典から*OED*まで複数の定義を比較することで，その語がもつ歴史的な意味だけでなく，辞書の違いを知り，効果的な使い分けを実践できる。「英語表現」を丹念にとらえる演習が可能だと言える。

ただしここには，コアカリキュラムが言うところの「様々な英語表現について理解している」は何を指すのか，という問題がある。語彙，慣用句，あるいは文法事項として扱われた用法が実際の文章の中で用いられているときに文意を正しく読みとれることだろうか。あるいは国際共通語としての英語の多様性を見出すことだろうか。ひと言で「英語文学」といっても，ジャンルや時代によって使われる言語も表現方法も異なり，そこに作者の個性が加わり，評価が定まった作品はそれぞれに芸術性を備えている，複雑なものである。モデルカリキュラムで言えば第2～5回の項目が作品理解を深める読み方を学ぶことに該当するのだろうが，項目ごとに学習するというより，1つの作品の読解によってそれを行うこともある程度可能である。また，「英語表現について理解している」が，作品がもつ人間観や社会観を捉えることまで含むのかどうかも定かではない。

② 文学作品で描かれている，英語が使われている国や地域の文化について理解している。

“The Flowers”は南北戦争後の再建期から1950年代までアメリカ南部で続いたJim Crow体制下の物語であり，その事情を抜きにして読むことはできない。文学作品の中には，このように特定の歴史的背景をもったり，社会や時の権威に対する強いプロテストを含むものがあった

りすることを知るのは有意義である。想像力を喚起する力がある作品を注意深く読むときに，読者は自分の文化的・社会的背景を越えたところにある作品から，普遍的な価値やメッセージを受け取るのであり，だからこそ人は外国文学を読むのではないだろうか。多くの学生は差別の問題に敏感であり，自分たちが生きる社会の問題としてとらえる視点をもっているので，過去のアメリカの話としてではなく，現在とこれからの日本の問題につなげて考えることができる。「英語が使われている国や地域」の想定が偏りがちであるという課題はあるが，短編小説であれば1つの科目の中で複数の作品を取り上げることによって対応することも可能である。

③　英語で書かれた代表的な文学について理解している。

Alice Walkerは，現代アメリカを代表する文学者の一人であり，その評価は確立していると言ってよい。“The Flowers”をWalkerの代表作と呼ぶことはできないが，「代表的」というカテゴリーに入れることはできる。アメリカ文学では，特に20世紀後半以降，多文化状況が顕著であり，Walkerの作品を取り上げることでそのような文化の実相に触れることができる。一方で，目標とされる「理解」が何を指すのかははっきりと把握できない。時代や地域ごとによく知られた作品名とあらすじ，文学者の名前を知っているということだろうか。そうであれば，そのような名作や偉大な文学者の名前を知っているという意味での「理解」が中学校や高等学校の教壇に立つうえで役立つとは考えにくい。それとも，ある国や地域の文学に特有のテーマや問題意識を見出しているということだろうか。その範囲にとどまるのであれば，地域文化という観点を持つことの意味はあるが，国際共通語としての英語という理念との矛盾を問われることを避けられない。

5. まとめ

「英語文学」を教職課程コアカリキュラムに含めるのであれば，実際に作品を精緻に読む経験が必須であり，それには短編小説を教材として用いるのが有効であるというのが筆者の結論である。はじめから終わりまで，物語の展開を追って完全に読み切るという経験は，短編小説ならではのものであるし，改めて読み直すということもしやすい。辞書をひくという行為が，検索窓にその語を入れてEnterキーを押すことと同じではないことを，将来中学校や高等学校の英語教師として辞書使用を指導する人は知っておくべきであろう。グループ・ディスカッションは筆者も取り入れているが，それを実りあるものにする前提は精緻な読みである。その繰り返しだけで15回の授業を終えるのではなく，映像を併用したり文学史的な講義を行ったりする部分があってよいが，複数の短編小説を組み合わせることによって，3つの学習項目のうち「英語表現」と「多様な文化」については何らかの形でカバーできると考えられる。

一方で，教職課程コアカリキュラムの「英語文学」がどのような形で教員養成に資する内容を提供できるかについては，さらに議論が必要である。文学素材を英語教育に用いることにつ

いては『文学教材を用いた英語授業の事例研究』（久世，2019），「英語（圏）文学」の授業については『教室の英文学』（日本英文学会関東支部，2017）のようなまとまった論考がある。中学校・高等学校の英語教育における文学素材の扱いと共に，教職課程において「英語文学」をどのように位置づけ，どのような授業を展開するかについて，さらに議論を続ける必要がある。ストーリーを追うことを原動力として読む力・調べる力・考える力をつけていくことができれば，それは教員養成に資するばかりでなく，言語教育の場からの「文学はずし」状況を変えていくことにつながるであろう。

参考文献

江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』研究社，2008

江利川春雄『英語教育論争史』研究社，2022

Gleibermann, Erik. 2018. “An Army of Spiritual Teachers: A Conversation with Alice Walker.” *World Literature Today* , Vol. 92, No. 6 (November/December 2018) 20–24

原田範行「はしがき」日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』，研究社，2017，iii–vii

伊村元道『日本の英語教育200年』大修館書店，2003

Jones, Edward P. 2000. Introduction to “The Flowers” in Hansen, Ron and Shepard, Jim eds. (2000). *You’ve Got to Read This: Contemporary American Writers Introduce Stories That Held Them in Awe* 580–581. (New York: Perennial).

粕谷恭子ほか「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」報告書，2021 https://www2.u-gakugei.ac.jp/~coretgu/ (2022/12/26)

久世恭子『文学教材を用いた英語授業の事例研究』ひつじ書房，2019

Mathews, Mitford M. 1951. *A Dictionary of Americanisms: On Historical Principles*. Meicho Fukyu Kai, 1985.

Mertz, Paul E. 1989. “Sharecropping and Tenancy” in *Encyclopedia of Southern Culture,* Univesity of North Carolina Press.

南出康雄ほか編『ジーニアス英和辞典第6版』大修館書店，2023

森本俊「中・高等学校教員養成課程　外国語（英語）コア・カリキュラムの批判的検討」『教職実践研究』第2号，常磐大学教職センター，2018，1–12

Nadal, Dani, et al. “Earliest floral grave lining from 13,700–11,700-y-old Natufian burials at Raqefet Cave, Mt. Carmel, Israel.” PANS (Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America) https://www.pnas.org/doi/full/10.1073/pnas.1302277110 (2022/12/20)

中村和恵「小説への誘い—英語圏文学を教える」日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』研究社，2017，233–242

西原貴之「コミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの教科書に掲載された文学教材の数とバリエーション及びその設問・言語活動」『LET関西支部研究集録18』，2020，19–39

高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』ひつじ書房，2015

高橋作太郎ほか編『リーダーズ英和辞典第3版』研究社，2012

Walker, Alice. 1973. *In Love & Trouble: Stories of Black Women*. Harcourt Brace Jovanovich.

Walker, Alice. 2014. *The World Will Follow Joy: Turning Madness into Flowers*. The New Press.

渡辺利雄『英語を学ぶ大学生と教える教師に—これでいいのか？英語教育と文学研究』研究社，2001

“Edward P. Jones” https://www.britannica.com/biography/Edward-P-Jones (2022/12/22)

NAACP (2022). “History of Lynchings.” https://naacp.org/find-resources/history-explained/history-

lynching-america(2022/12/22)
Oxford English Dictionary (online) “sharecropper.” https://www.oed.com/view/Entry/95451054?redirectedFrom=sharecropper#eid (2022/12/22)
United States Department of Agriculture. 2022. “Country Summary” https://ipad.fas.usda.gov/countrysummary/Default.aspx?id=US&crop=Cotton, https://ipad.fas.usda.gov/countrysummary/Default.aspx?id=US&crop=Peanut（2022/12/17）

（たんじ　めぐみ）

Literature in English Teacher Training: Reading Alice Walker's "The Flowers"

Megumi TANJI

Abstract

In Core Curriculum for Junior High and High School English Teacher Training (2017), "Literature in English" is one of the three areas of knowledge on English teaching. However, a study of the Core Curriculum shows that students have a lower sense of attainment in the literature study compared with other significant areas. This paper argues how a close reading of a short story can contribute to attaining the Core Curriculum's goals by presenting a detailed study of Alice Walker's story. Following the storyline will help enhance students' ability to read English, consult dictionaries and other sources of information, and think deeply, which is required for teaching.

Keywords: Core Curriculum for Junior High and High School English Teacher Training Courses, literature in English, short story, close reading, dictionary skills